

歴史よもやま話 その 20

井伊直弼 実は茶の湯宗匠でもあった

幕末の混乱期に、反対勢力を肅正し、そして「桜田門外の変」で暗殺された**時の幕府大老・井伊直弼**が、実は**茶の湯の宗匠「宗観」**であったことは案外知られていない。

「茶の湯一会集」という茶道の専門書を書き残している。このなかで主なテーマとなる「一期一会」は、元々千利休が標榜し、「山上宗二記」・「茶湯者覚悟十体」の中に書かれているものだったが、直弼の著書によって、今日に広く認識され、茶道を嗜む人達の標語となっている。直弼は「茶の湯一会集」のなか、以下に書いている。

「そもそも茶の湯の交會は一期一会といひて、たとえ幾度おなし主客交會するとも今日の會にふたたびかへらざる事を思へは 実に我一世一度の會也。」

直弼が茶の湯に出会ったのは、部屋住みの「埋木舎」時代、石州流・月窓庵真野善次に私事し、茶名を「宗観」またの名を「無根水」（ムネミ）とした。

「喫茶中に貴賤を選ばず」、「喫茶の道は、上は雲の上より下賤の田子に至るまで、少しも違ふことなく相応はしからぬ事もなく、誠に同じく行はれて、又富者・貧者は又共に同じく樂まるる道なれば・・・」と茶の湯における平等を説き、これを実践した。

31 才のとき、前述の「茶の湯一会集」を著わしている。

「埋木舎」時代には茶の湯だけでなく、和歌や絵も学んでおり、優れた作品を残している。また、屋敷の庭に焼き物の窯を造って、彦根藩が奨励する「湖東焼」を実践しており、彦根藩の殖産に貢献している。

井伊直弼は彦根藩藩主・井伊直中の 14 男として彦根城で生まれた。32 才まで部屋住みとして城内三の丸に住み、起居した屋敷を自ら「埋木舎」と名付けて日陰の日々を過ごしていたが、兄たちが次々と亡くなり、図らずも家督を継ぐこととなった。

勉学や趣味に穏やかな日々を送っていた直弼が、幕府大老職という激動のさなかに身を投じることになり、後に「安政の大獄」と言われる肅正の嵐を起こし、多くの怨みを買ったあげく「桜田門外の変」で暗殺される。享年 44 才、苛烈で短い一生だった。

後世、必ずしも高く評価されていない井伊直弼は、時代に翻弄され数奇な人生を歩んだ気の毒な人とも言えるかもしれない。

直弼はいま、世田ヶ谷・井伊家菩提寺・豪徳寺の墓所で静かに眠っている。